

政 府は二〇二五年国際博覧会の大阪への誘致をはかっている。十一月二十三日のBIE総会における投票で開催が決まれば、一九七〇年大阪万博、一九九〇年花博に続き、大阪では三度目の国際博覧会開催となる。

私は当初から基本構想立案、とりわけ会場計画に深く関わってきた。そのため、二〇二五年国際博覧会の日本誘致の意義について問われる機会が多い。識者のなかにも、大量動員型の巨大イベントは不要だとみる否定的な人は多い。しかし私はそうは思わない。二十一世紀になって国際博覧会は、BIEの決議によって、その意義を大きく変えている。従来の使命に加えて、人類が直面している諸課題を解決する場と位置づけられた。ゆえに二〇二五年国際博覧会は、一九七〇年大阪万博とは、おのずとまったく異なる事業となる。私は機会があるたびに、「次世代型の博覧会」のモデルを提示しなければならぬと強調してきた。

検討の結果、二〇二五年国際博覧会の構想案では、「ソサエティ5・0」の実現を前提に、「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに掲げるものとした。あわせて「Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）」、いわゆるSDGsの達成に貢献することが強調された。また会場を「ピープルズ・リビング・ラボ」すなわち、実用化されていない新技術や最先端のシステムを試行する「社会実験の場」とする

各 人 各 説

## 2025年国際博覧会の誘致に向けて

大阪府立大学 研究推進機構 教授

橋爪紳也

Shinya Hashizume



ことがコンセプトとされた。例えば待ち時間をゼロにする予約システムや、ITによる会場内の迷子サポートなどが例示された。またリアルな博覧会場とバーチャルな博覧会場とを重層させ、かつ双方を融合させながら、世界の誰もが会場にアクセスして交流できる機能を実装させたいと考えている。

思い起こすならば、一九七〇年大阪万博は土木や建築の領域にあって、おおいなる実験の場であった。パビリオンも実に多彩であった。各国それぞれに優れたデザインの展示館を建設、一方、企業出展群は獨創性を競った。メタボリズムの思潮を受けたパビリオンが話題になり、エキスポタワーや住友児童話館など空中都市のモデルとなる提案もあった。

技術面でも新たな試みがあった。シンボルゾーンの大屋根を架構するべく、日本で初となるジャッキアップ工法が採用された。またアメリカ館、富士グループパビリオン、電力館の一部で空気膜構造が導入された。会場は、いわば「建築博覧会」とでも称するべき様相を呈した。

二〇二五年国際博覧会の大坂開催が決定すれば、私たち建築や土木の専門家も、従来にないデザイン、材料、工法、システムの提案と、近未来の実用化を視野に入れた実証実験を展開しなければならぬ。全国の建設業界を挙げて、大阪への万博誘致に向けた期待感を盛り上げていきたいものである。